

# にじいろの義

今年もあちこちで節分の豆まきを楽しむ光景が見られた。特に、子どもにとっては楽しみな年中行事の一つだろう。節分は、元をたどると、疫病をもたらす疫鬼を追い払うために大晦日に行われていた年中行事の追儺を源流としている。ただし、一口に鬼と言っても、獄卒の鬼や疫病以外の病をもたらす鬼もあり、多様であった。



鬼は海の彼方からやってくるものだとも考えられていた。たとえば、12世紀の貴族の日記にも、南方の木で造られた船に乗って伊豆国（現在の伊豆半島と伊豆諸島）の島にやってきた

5、6人の「希異」な容貌をした鬼が腋から火を出し畑を焼き払い逃げ去った、という事件が書きとどめられている。この事件を伝え聞き、記録した貴族、九条兼実は、鬼の正体は「蚕夷」の類だろう、としている。兼実の推測のように、伊豆の島の人々は、滅多に目にするのではない、今でいう外国人を鬼と見なし驚愕したのだろうか。なお、14世紀の『八幡愚童訓』には、仲哀天皇（日本武尊の子）の時代に「異国」から鬼の姿をした者たちが攻めてきた、とある。ここでも、海の向こうから来る人が悪さをする鬼である、と見なされている。

実は、海の向こうには鬼の住む島があると考えられていた。14世紀の『日本図』（金沢文庫所蔵）には、当時の日本の南方に「羅刹国」が描かれている。「羅刹」とは鬼のことであり、



## 小山聡子

歴史学者・二松学舎大学文学部教授

こやま・さとこ 1976年生まれ。専門は日本宗教史。仏教や呪術、幽霊などについて研究・執筆。3月には『鬼と日本人の歴史』（ちくまプリマー新書）を刊行する。

## 差別や偏見助長 排除のレッテル

# 歴史が語る 鬼の正体

「羅刹国」はいわゆる鬼ヶ島である。

海の向こうから来る人を鬼と見なし恐れられたことは、古代や中世にとどまらない。近代になっても、同様の見方は根強く残っていた。

たとえば、桃太郎の鬼退治の話は、桃太郎を日本側、鬼を敵国側に見立て、戦争の正当化のために使われた。日露戦争の際の絵本『日露ぼんち 桃太郎のロスキー征伐』では、他国の人を殺害したり宝物を盗んだりする西北に住む悪い鬼「露西鬼」が、桃太郎による征伐の対象とされている。

また、アジア・太平洋戦争時には、米兵や英兵を鬼と見なし彼らの卑劣さや残虐さが強調された。真珠湾攻撃成功とその正当性を国民に知らしめる目的で

制作されたアニメーション映画「桃太郎の海鷲」は、真珠湾攻撃を鬼退治になぞらえたプロパガンダ映画だった。



このように鬼のレッテルは、歴史の中で差別や偏見を助長し、戦争の正当化にも用いられてきた。島国だからこそ、言語や体格、顔つきが異なる外国人に對し得体の知れない恐怖がいだかれやすかったのだろう。

ちなみに、古典作品や古典芸能では、嫉妬に苦しむ女性がたびたび鬼の姿で表現されてきた。成人男性を中心とする社会の中で、周縁に位置づけられるものを鬼として恐れ、差別視し、排除してきたのである。現在、鬼というと、真っ先に

昔話に出てくる鬼が悪い浮かべられるかもしれない。また、ゲームや漫画、子供向け絵本などでは、面白おかしい鬼や癒やし系の鬼が人気を博している。しかし、現代に生きる我々は、鬼をエンタメの素材として享受するだけではなく、差別や偏見、排除のレッテルとして、鬼が何度でも使われてきた歴史があることを忘れてはならない。

昨年2月から、ロシアとウクライナの間で戦争が続いている。ロシアの軍事侵攻を正当化する余地はないが、かの国が理解不能な存在だと見なす一面的な報道や論調を目にすると、久しぶりに鬼が復活するのではないかと不安に思う。

◆多様な知の地平を切りひらく気鋭の寄稿を、原則月1回掲載します。